

序

この報告書は、2017年2月22日にお茶の水女子大学で開催したジェンダー研究所主催のセミナー「日本における女性と経済学」での報告やコメントと、セミナーを終えて各報告者らに追加的なコメントをいただいて、それらをまとめたものである。

女性と経済学との歴史的関わりという点では、たとえば eds., Chris Nyland and Robert W. Dimand, *The Status of Women in Classical Economic Thought*, Edward Elgar Pub, 2004に見られるように、女性経済学者の系譜をたどる研究などがあるが、日本における女性と経済学に関連する研究は立ちおけてきた。しかし、2016年に画期的な研究が公刊された。栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵編著『日本における女性と経済学 — 1910年代の黎明期から現代へ』（北海道大学出版会、2016年）である。

この著作では、女性の経済学者として、日本で最初に経済学講義を行なった松平友子の事跡、新たなる学問分野としての家政学の誕生、従来とは異なった女性への教育システムの整備、さらにはジェンダー格差の是正に向けた理論的・実践的取り組みの歴史、労働運動フェミニズムの展開が手際よくまとめられている。鍵となる重要な人物として、山川菊栄、森本厚吉、松平友子、伊藤秋子、御船美智子、竹中恵美子らを取り上げられており、本セミナーでも、これらの論者の議論を通して、日本における女性と経済学との関わり、現実の経済問題や労働問題への応答など、女性と経済学という視点から浮かび上がってくる諸論点について議論が行なわれた。その意味で、本報告書は、『日本における女性と経済学 — 1910年代の黎明期から現代へ』の続編的な位置付けにあるものと言える。

板井広明

